

ブクブクは、その何千人という兵隊がすっかりおなかの中へ入ってしまうと、「ははは。これでよし。」と笑いながら、そのままノソリノソリと町の方へ歩いていきました。ブクブクは、それだけの兵隊を馬といっしょにおなかへ入れたのですから、少し歩きにくくなりましたが、それでも大またにノコノコと歩いて、町へはいりました。町中では王子がうまくねずの番をして、世界一のりっぱな王女をおよめにもらって帰って来たというので、みんな大よろこびで、おどりさわぎました。王子はブクブクのすがたを見ると「おお、帰ったか。あの兵隊たちはどうした。」と聞きました。ブクブクはニタニタ笑いながら大きなおなかをポンとたたいて、「このとおりでございます。みんなこの中へ入れてしまいました。」と言いました。王子は、ハッハと笑って、「もういいから出しておやりよ。」と言いました。「そうですね。兵隊や馬が、はらの中ではあとではらが下るとやっかいですから、出してしまいいましょ。」ブクブクはこう言って、わざわざ町のまん中の大きな広場まで歩いていきました。町中のものは大山のような大きな大きな大男が来たので、びっくりして、わいわい言いながら、みんなでゾロゾロ後へついていきました。ブクブクは広場へ来ると、「さあ、みんなどけどけ、あぶないぞ。」と言いながら、大通りにたかっている人を追いはらいました。そして両手で横っぱらをおさえて、「ゴホン、ゴホン。」と、せきをしました。すると、そのたんびにはらの中から、兵が十人ずつかたまっぺんズボンズボンと、とび出しました。町のものは、「ウワーウワー。」とおもしろがって、みんなで手をたたいて、はやし立てました。ころがり